
旅立ちの空

和乃璃瑚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅立ちの空

【Nコード】

N8810C

【作者名】

和乃璃瑚

【あらすじ】

積極的でリーダー的存在の春菜、常に冷静で裏リーダーとも言える佐智子、自由奔放で手の掛かる妹のような存在の萌、いつも明るくてムードメーカーでもある芽衣、そして「私」こと貴子は、高校受験の日知り合い、偶然同じクラスになった。卒業後は違う道歩んだものの、5人はお互い、なくてはならない存在の親友となっていた。ある日、芽衣からメンバーに重大な告白がされる。芽衣の告白とは一体何なのか、そして5人の行く末は……

1、告白（前書き）

これは、2004年の3月に書いた、私の7作目の作品です。

本当の友情とは何か、相手を思う心とは何か、そんなことを考えながら書きました。

今までの作品の中で、1番入り込んで書いた作品かもしれません。

自分の大切な人を思い出しながら読んで頂けると嬉しいです。

1、告白

煙突からのぼる煙が、澄んだ青空を泳いでいく。私たちは精一杯の笑顔で空に向かって手を振った。風に揺られた煙は、まるで私たちに手を振り返しているようだった。

1、告白

クリスマス前の日曜日、私は吹きすさぶ風に肩をすくめながら、待ち合わせ場所へ向かっていた。

「貴子！」

自分と呼ぶ声に、マフラーに鼻先までうずめたまま目線を前にやると、春菜と佐智子が車の中から手を振っていた。

車に乗り込むと、寒くて固まっていた肩から徐々に力が抜けていく。

「ふー、生き返ったあ」

私がようやくマフラーをはずしながら言うと、佐智子が笑って言った。

「貴子ったら、おおげさね」

「ね、それより萌は？ 今日来れるんでしょ？」

「うん、そう言ってた」

「てことは……」

「いつも通りってことだ」

私たちは声を揃えて言い、肩をすくめて苦笑いした。

萌は遅刻の常習犯だ。毎回毎回、必ず少しずつ遅れてくる。「待

つのが嫌だから、最後になるようにわざと遅れてくるんだ」などと変な理屈をこねて、あっけらかんと笑う。初めは文句を言っていた私たちも、今ではもう諦めている。

「ま、それを見越して待ち合わせ時間を決めてるから、芽衣の家には時間通り着くはずよ」

「さすが佐智子だね」

私は感心して言った。

私たちは今から約10年前、高校1年の時に知り合った。厳密に言えば、出会ったのは入試の日だから中学3年の時ということになるのだろうか。

専願だった私は、午後の面接のためにお弁当持参で入試に臨んだ。試験が終わって昼休みになると、ほとんどの人が食堂に食べに行ったので、私のようなお弁当組が数人残っただけだった。

お互い見ず知らずだったので、みんなが黙ってお弁当を食べていた。静まり返った中で食べるお弁当はとてもまずく感じた。外へ出て食べようか、いや、それは感じが悪いだろうかなどと考えていると、誰かが声を出した。

「せっかくだから、おしゃべりしながら食べない？　黙って食べてると、なんだか喉がつかっちゃう」

私はもちろん、他の人たちも同じように感じていたようで、この一言をきっかけに私たちは自己紹介をしあいながら賑やかに食事をした。

そのおしゃべりのお陰でリラックスして面接に臨めた私は無事合格し、満開の桜の下、校門をくぐる事ができた。

入学式を終えて教室に行くと、壁に全員の名前が貼りだされていた。何となくそれを眺めていると、見覚えのある名前を見つけた。

「同じクラスだね」

肩を叩かれて振り向くと、当の本人、春菜だった。

「よかった、知ってる人が1人でもいて。これからよろしくね」

私がほっとして言うと、春菜は教室の後ろを指さしながら言った。
「1人じゃないよ」

春菜の指先をたどると、そこには入試の日に同じお弁当組だった佐智子と萌と芽衣がいた。

4人とはそれ以来の付き合いだ。

春菜は積極的でハキハキしているリーダー的存在。入試の日に、最初に話し掛けたのが春菜だ。私たちをいつもまとめて引っ張ってくれている。

佐智子は細かいことを考えるのが得意で、裏リーダーとも言える。常に冷静で、何があっても落ち着いている。

萌は自由奔放でわがままで、泣いたり怒ったり、感情を出したいだけ出す。だから周りにいる私たちはいつも振り回されているのだが、なぜか憎めない。手のかかる妹のようなものだ。

芽衣はいつも明るくて元気なムードメーカー。芽衣がいる時ではない時では、私たちの間に漂う空気さえ違うような気がする。

私はと言うと、どうということはない。と言っても、これは別に自分を卑下しているわけではない。確かに以前は、4人のような個性を持ち合わせていない自分はつまらない人間だと思っていたのだが、芽衣に「だからいいのよ。中和剤になれるじゃない。それはすごく重要なパートよ」と言われて以来、『どうということはない』のもひとつの個性なんだと思うようになった。

こんなにバラバラの私たちだったが、なぜかとても気が合った。

多感な時期に3年間同じクラスだったので、もちろん喧嘩は数え切れないほどした。

「もう絶交よ！」

「こっちだって！」

こんなやりとりは何回も繰り返されたが、その度にお互いの必要性を感じて、絆が深まっていった。

今まではお互いのツボを心得ていて、喧嘩をすることはほとんどない。意見が食い違っても、感情的に言い合わずにすむので、逆に

自分にとってプラスになるのだ。

佐智子の、相変わらずの手回しのよさに私と春菜が感心していると、窓をコツコツと叩く音がした。見ると萌がニコニコしながら手を振っていた。

「おはよ。今日は寒いねえ」

車に乗り込んだできた萌は、遅刻をわびるでもなく、あっけらかんと言った。そんなことにも慣れている私たちは、「ほんとだよね」などと相づちを打ちながら車を発進させた。

ちょうど30分後、私たちは芽衣の家に着いた。

芽衣は親元を離れてひとり暮らしをしている。実家が遠いわけではないのだが、いろんな意味で自立するためにと始めたひとり暮らしは、芽衣にとっては大成功だった。今まで苦手だと思っていた掃除や料理などの家事一切に、芽衣はめきめきと頭角を現した。今ではそこらへんの主婦よりも優秀だ。

「いらっしやい」

インターホンを押すと、すぐに芽衣が顔を出した。

「ごめんね、わざわざうちまで来てもらっちゃって。さ、入って入って」

「お邪魔します」

私たちは口々に言いながら、出されたスリッパに足を入れた。リビングに入ると、食欲をそそる匂いがたちこめていた。

「うわ、なんかおいしそうな匂い！」

手土産のケーキを渡しながら言うと、芽衣はいたずらっぽく笑いながら答えた。

「この前ドタキャンしちゃったお詫びに、今日は特別に腕をふるったの」

「そう言えばそうだったね。体調悪いって言ってたけど、もう大丈夫なの？」

佐智子が聞いたのだが、芽衣の答えを聞く前に萌が声をあげた。

「あゝん、私、急にお腹すいてきちゃった。ねえ、もう食べようよ」
わがまま娘、萌の一言で少し早めのランチを始めることが決まった。もっとも私たちもお腹がすいていたので、今回ばかりは萌を誉めてあげてもよいくらいだった。

芽衣の料理はまたレベルアップしていて、これで商売ができるんじゃないかと思うくらいおいしかった。私たちはくだらない話をしては大笑いしながらランチを楽しんだ。

「もうダメ、お腹いっぱい」

萌が絨毯の上にごろんと横になった。

「萌、そんなことしたら牛になっちゃうよ」

佐智子が冗談まじりに注意すると、萌は開き直って言った。

「いいもん。だってもう動けない」

「へえ、じゃ、萌のケーキはみんなで分けちゃおっか」

春菜がニヤニヤしながら言うのと、コーヒーを入れていた芽衣も調子を合わせる。

「んじゃ、コーヒーも4つでいいよね」

「やだ、食べるわよ。それは別腹だもん」

慌てて飛び起きた萌に、私たちは大笑いした。

ジャンケンをして、順番に好きなケーキを取っていく。私はこの争奪戦が得意だ。今日もちろん勝ったので、1番のりでケーキに手を伸ばす。

ようやく全員にケーキが渡って食べ始めると、芽衣が口を開いた。

「私、ガンなんだって」

あまりに唐突で、しかもごく普通にケーキの周りのフィルムをはずしながら言うので、私たちは混乱した。

「今なんて言ったの？」

「ガンだって」

「誰が？」

「私が」

「ガンって何？」

「ガンはガンでしょ」

一瞬の沈黙の後、やっと頭の中に芽衣の言葉が浸透した私たちは、途端に口々にしゃべりだした。

「どういこと!?!」

「どこのガンなの?」

「なんで芽衣が」

「いつ分かったの?」

芽衣はその様子に苦笑いしながら言った。

「そんなに矢継ぎ早に質問されても答えらんないよ」

そんな芽衣に、珍しく春菜が声を荒げた。

「ちよつと! 何のんきに言ってるのよ。そんなね、話を振るだけ振っというてほったらかしにしないでよ!」

泣き虫の萌はもう泣いている。佐智子は黙っていた。私はどうすればいいのか分からなかった。

「ごめん。そういうつもりじゃなかったんだけど、あんまり深刻にならずに聞いてほしくて……」

芽衣は素直に謝った。

「分かった。じゃ、みんな、落ち着いて聞こう」

春菜が言うと、佐智子が促した。

「芽衣、初めから順を追って詳しく説明して」

芽衣はコーヒーを1口すすってから話した。

「2、3ヶ月前かな、お腹の下の方に何かしこりがあるように感じたの。初めは気のせいだと思ってたんだけどね、なんだか気になつてきちゃって、病院に行ったの。そしたらもつと詳しく検査をしようってことになって。その検査が、この前みんなとの約束をドタキャンした日にあったの」

「それならそうと言ってくれたらよかったのに」

春菜が不満そうに言う。

「でも心配させたくなかったし、検査結果が出てからでいいかなって思ってた」

「それで？　続きを話して」

佐智子が芽衣をせつつく。

「うん。で、いろいろ検査をした結果、卵巣ガンだって確定したの」
私たちがかける言葉を探しながら戸惑っていると、佐智子が冷静に現実的な質問をした。

「で？　現状はどうなの？　今後どうやって対処していくの？」

「とりあえず、来週入院して手術することになってるの。手術日はまだ決まってるんだけど、卵巣2つとも子宮、全部取っちゃわないといけないみたい」

「卵巣2つとも子宮!？」

私は思わず声を上げた。

卵巣も子宮も取ってしまうということは、赤ちゃんを産むことができないということだ。まだ若くて独身の芽衣にとって、これほどショックなことはないだろう。

見回すと、春菜も佐智子も萌も、何ともいえない表情をしていた。きっと3人も、私と同じことを考えているのだろう。

言葉を失って黙りこくっている私たちに、芽衣は明るく言った。

「心配しないで。手術しちゃえば治るんだし、子供を産めなくなることも、私、そんなショックじゃないんだ。前からあんまり子供好きじゃないって言ってたでしょ？　ちようどいい言い訳になるってもんよ」

「うん……」

「深刻にならないでって言ったでしょ。ほんとにすぐ治っちゃうんだから」

芽衣が苦笑いをしながら言ったので、私たちもようやくいつもの私たちに戻った。

「萌もいつまでも泣いてないで。泣きやまないと、ケーキ食べちゃうよ」

「ほら、ティッシュ」

春菜は萌に箱ごと渡しておいて、芽衣に言った。

「病室とか、はっきりしたら教えて。いるものがあつたらいつでも言つてね」

「うん、分かった。ありがとう」

「そうだ、毎日みんなでお見舞いに行っちゃおっか」

「えー、そんなことされたら、うるさくて治療なんてできないわよ」

「何よ、迷惑だつて言うの？ よし、ほんとに毎日行つてやろつと」
「やだー！！」

私たちは笑った。

卵巣ガンについての知識なんてなかったが、治ると信じていたから、いつものように笑っていられた。

知らないということは、とても幸せで、とても残酷なことなのか
もしれない。

私たちはまだ、笑うことの難しさを知らずにいた。

2、約束

「こっち、こっち！」

店に入ってキョロキョロしていると、奥の席から春菜が呼んだ。
珍しく萌も既に来ている。

「どうしたの、急に」

芽衣の家でみんなが集まったのは、ほんの2日前のことだ。にもかかわらず、昨日の夜に急に招集がかかったのだ。それも芽衣には内緒でということだ。

「今日集まってもらったのは、芽衣の件なの」

佐智子が口を開いた。

「どうということ？」

先に来ていた春菜に聞いたのだが、春菜は首を振った。

「分かんない。私もまだ何も聞いてないの」

「佐智子、何なの？ 芽衣の件って、病気のこと？」

萌が不安げに佐智子に聞く。

「そう。私ね、卵巣ガンについて少し調べてみたの。そしたらこないだ芽衣が言ってたような簡単な話じゃないみたいなの」

「簡単な話じゃないって、どうということ？」

春菜が首をかしげて聞く。

「芽衣は手術すればすぐ治るって言ってたじゃない？ でもね、私が調べたところでは、卵巣ガンってのは1万人に2、3人くらいしかからないんだけど、もしなった場合、女性器のガンの中では1番治療成績が悪いらしいの」

「治療成績が悪いって……」

「つまり……、治りにくいってこと？」

私に続けて春菜が聞くと、佐智子は黙って頷いた。

「卵巣ガンってね、そうそう検査するところでもないし、腫瘍が大きくなるまでは何の症状もでないらしいの。だから見つかった時に

はかなり進行してる人が多いんだって」

「てことは、芽衣のガンも進行してるってこと？」

「その可能性が大きいと思う」

「そんな……」

私たちがショックで何も言えずにいると、佐智子が続けた。

「早期発見が難しいから、見つかった時には既に転移してたり、手術しても全部取りきれないこともあって、手術後も抗がん剤を投与しなくちゃいけないんだって。かなり気長に治療していくみたい。それにね」

「もうやだ！ 聞きたくない！」

萌が耳をふさいで佐智子の話を遮った。

「そんな辛い話、聞きたくないよ。芽衣がかわいそうでたまんないよ。なんで？ なんで佐智子は普通にそんなこと話せんのか？ なんで春菜も貴子も普通に聞いてられんの？」

萌は涙を流しながら言った。

「なんで？ やだよ。こんなのやだよ」

萌は流れ落ちる涙を拭うこともせず、泣きじゃくっている。気付けば私たちもみんな泣いていた。

周りの客や店員がチラチラとこっちを見ていたが、それをどう思うか余裕は私たちにはなかった。

「萌」

春菜が手の甲で涙を拭いて言った。

「私だって辛いよ。佐智子だって貴子だって辛いはずだよ。でもね、一番辛いのは芽衣なんだよ。私たちが目をそらすわけにはいかないの。逃げちゃだめなんだよ」

「そうだよ。私だって芽衣がかわいそうでたまんない。なんで芽衣がっと思う。けどそんなこと思ってるだけじゃ、何にもなんないと思うんだ」

私も涙を拭いて言った。佐智子が萌の肩に手を置き、顔を覗き込んだ。

「私たちは仲間でしょ？ 病気を5つに分けることはできないけど、辛い気持ちを分け合うことは、私たちならできると思わない？」

萌は鼻をすすって深呼吸した。

「分かった。いつもは芽衣がみんなを明るくしてくれてたけど、今度は私たちが頑張らないとね。続き、話して。もう大丈夫だから」

佐智子は頷いて話を再開した。

「転移はいろんなところにするらしいわ。子宮や卵管や、骨盤内の臓器に転移して、腸や腹膜にもだんだん転移していくんだって。腹水がたまるとお腹が膨れてくるって。もっと進行すると、肺とかにも転移してって胸水がたまって息苦しくなってくるんだって」

腹水がたまるとか胸水がたまるとか、私にはまったく想像もつかないことだったが、何となく恐ろしくて、私は思わず身震いした。

春菜は何かを考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「芽衣は当然そのこと知ってるよね」

「たぶんね。卵巣2つと子宮を取るって時点で、説明を受けてると思う」

「なのになんで芽衣はすぐ治るって言ったんだろ」

私は素朴な疑問を口にした。

「そうあって欲しいって長いと、私たちに心配させないでおうって気持ちからじゃないかな」

「そんな、水くさいじゃない」

萌がほっぺを膨らませて言うのと、春菜が言った。

「そうじゃなくて、芽衣のことだからきつと本当に治るって信じてるのよ。だから、私たちに余計な心配をかけないでおうと思ったんじゃないかな。だから私たちも、そう信じようよ」

「そうだね。何も卵巣ガンが不治の病ってわけじゃないんだもんね。本当に手術したらすぐ治っちゃうかもしれないし」

「そうだよ！ 芽衣はあんなにいい子なんだもん」

私たちは、卵巣ガンについて得た新しい情報については、知らないふりをしておこうと決めた。

病室のドアをノックすると、中から芽衣の母親が顔を覗かせた。

「こんにちは」

「あら、貴子ちゃん。来てくれたの？　せっかく来てくれたのに悪いんだけど、今寝てるのよ」

母親がそう言うので帰ろうかと思っていると、奥から声が聞こえた。

「いいよ、入って」

「あら、起きたの？」

「起きるわよ。そんな大声で話されたら」

芽衣は笑いながら言った。

「そう？　小さい声で話したつもりだったんだけど、もともと大きいからねえ」

「ちゃんと自覚してるんだ」

「してるわよ。ただねえ、ちょっとボリュームが壊れてるみたいで、調整ができないのよね」

母親があっけらかんと言うので、私は笑ってしまった。

芽衣の明るさは母親譲りなのだ。高校時代に芽衣の家に遊びに行った時なんか、芽衣に追い出されるまで、私たちとしゃべっていたものだった。芽衣が1人暮らしを始めてからは滅多に会わなくなったが、相変わらずのようだった。

「どう？　調子は」

「まあまあね」

芽衣は母親にベットを起こしてもらいながら言った。

「寝たい時に寝て、好きなだけテレビを見られて、それなりに楽しんでたりもすんのよね」

「ほんと、あれしてこれしてって、子供に戻ったみたいなのよ」

母親がちよっと嬉しそうに苦笑いしながら言って、芽衣に顔を向けた。

「じゃ、お母さん、ちよっと買い物に行ってくるから。貴子ちゃん、

ゆっくりしてっね」

「はい、行ってらっしゃい」

母親が出ていくと、私は手近な椅子を引き寄せて座った。

「あさってみんなで来る予定なんだけど、近くに用事があったから寄ってみたんだ」

「ありがと。でもほんつと入院って退屈よね」

「今は特に手術のあとだからじゃない？」

「それはそうだろうけど。毎日寝てばかりなのよ。もし寝だめが本当にできるなら、退院したら1ヶ月くらい寝なくてもいいかも」

「そんなことだろうと思って、いいもの持ってきたの」

私は笑いながら、ポータブルDVDプレーヤーを鞆から出した。

「わぁ！　どうしたの、それ」

芽衣が驚きと喜びの入り混じった声を上げた。

「実はね、お兄ちゃんからもらったの。『1人暮らしにはこれくらいがいいんだ』なんて言ってポータブルを買ったんだけどね、やっぱり大画面で見たくなくなってきたんだって」

「それで買い換えたの？」

「そ。それもホームシアターセットっていうの？　そういうやつにしたの」

「すごい。あれって高いんじゃないの？」

「うん。私もあんまり詳しくないんだけど、少なくとも普通のデスクよりはかなり高いんじゃないかな」

「へえ。それでポータブルをぽんと貴子にくれちゃうなんて、お兄ちゃん、太っ腹ね」

「ていうか、ちょっとバカなのよ。何かとはまりやすいのよね。ま、そのお陰でこれがもらえたんだからいいんだけど」

私が辛らつに言うものだから、芽衣は吹き出した。

「貴子ってば、ほんとお兄ちゃんには辛口よね。気の毒になっちゃう」

そう言いながら、芽衣は嬉しそうにプレーヤーをいじっている。

「今日は私の持ってるDVDから適当に選んで持ってきたけど、何かクエストあったら言って。レンタルしてくるから」

「ありがと。でも貴子の持ってるのを順番に貸してくれたらいいよ。貴子は映画が好きだから、貴子が選んだのはハズレがないと思うし」
「うわあ、そう言われるとプレッシャーだな。中には結構マニアックなものもあるからね」

「いいの、いいの。こういう時でないと、人が選んだものって見ないじゃない？ 自分で選ぶとどうしても偏った選び方しちゃうけど、人に選んでもらったら、自分の意外な好みに気付いたりすると思うのよ」

「分かった。じゃ、私のお気に入りを何枚かまとめて持ってくるね」
私はプレーヤーとDVDを横の棚に置き、座りなおして聞いた。

「で、肝心な話をしてなかったけど、術後の経過はどうなの？」

「うん、順調よ。明日ね、先生から今後のことについての説明があるの。早く退院できるといいんだけど」

「こんなに元気なんでもん、きつとすぐよ。退院したらさ、みんなでお祝いしようよ。芽衣にはかなわないけど、頑張って料理するから」

「ほんと？ 楽しみだな」

「そのためにも、今はしっかり休養をとって早く治さないとね」

私たちは、退院したら何をするかという相談をしながら過ごした。

2日後、私たちは揃って芽衣を見舞った。

「あら、今日はみんな来てくれたの？ ありがとうね」

また病室から顔を出した芽衣の母親が言った。

「ささ、入って」

母親に促されてぞろぞろと病室に入ると、芽衣が嬉しそうに言った。

「待ってたよ！ 今日来てくれるって、この前貴子から聞いてたから、ずっと楽しみにしてたんだ」

「お花持ってきたんだけど、花瓶ある？」

春菜が花束を見せながら言う、母親が手を出した。

「ナースステーションで借りてくるわ」

「あ、すいません。お願いします」

母親は花に顔を近づけて「いい香りねえ」などとひとり言を言いながら病室を出て行った。

「みんなありがと。適当に座って」

私たちは芽衣のベッドを囲むようにして座った。

「貴子が貸してくれたDVD、さっそく見たよ」

「ほんと？ 今日何枚か持ってきたから、また暇つぶしにでもして」

「このプレーヤー、どうしたの？」

春菜が驚いて聞いたので、私はまた兄の話をした。

「貴子のお兄ちゃんらしいよね」

佐智子が笑いながら言う。

萌が私の袖を引っ張りながら聞いた。

「ね、ね。どんなDVD持ってきたの？ 貴子って映画好きだから、

おもしろいのいっぱいありそうだよ」

「とりあえず、いろんなタイプのを持ってきたんだ」

言いながら私がDVDを取り出すと、みんなはそれぞれ手に取った。あらすじを読んだりして熱中しているので、私は

「ちょっとおばさん手伝ってくるね」

と声をかけて、病室を出た。

「えーと、どこだろ。給湯室かな」

独り言を言いながら廊下を歩いていると、どこからすすり泣く声が聞こえてきた。

「まさかこんな真昼間に幽霊じゃないわよね」

呟きながら、見つけた給湯室を覗くと、そこで泣いていたのは芽衣の母親だった。すぐに引き返そうとしたのだが、その途端、母親に気付かれてしまった。

「貴子ちゃん……」

「あの、ごめんなさい。何か手伝おうと思って来てみたんです」

私がしどろもどろになって言う、母親は涙を拭いて弱々しく微笑んだ。

「ううん、いいのよ。でもこのことは芽衣には黙っておいてね」

「はい」

母親は花瓶に入れた花をいじりながら、なかなか動こうとしなかった。私は出ていくべきか、ここにいたべきかと迷いながら動けずにいた。

いつも明るい母親がこんな風に泣いているなんて、よっぽどのことがあったに違いない。私はそのことにショックを受けながら、嫌な予感がしていた。重くのしかかる沈黙が辛く、逃げ出してしまいたかった。

「無理だったの」

母親が唐突に口を開いた。私は何のことだか分からずに聞き返した。

「え？」

母親は、相変わらず花をいじりながら言った。

「手術はしたものの、もうあちこちに転移しててね。全部は取りきれなかったって」

「そんな……」

私は、普段は勘が鈍いのに今日だけ当たってしまった自分を呪った。前に佐智子が言っていた、『見つかった時にはかなり進行していることが多い』という言葉が頭をよぎった。

「それ、芽衣は知ってるんですか？」

私が聞くと、母親は静かに頷いた。

「昨日、先生から説明があったから」

「さっきはいつもと変わらない感じだったのに」

私が言うと、母親は泣き笑いのような顔で言った。

「あの子はちょっと強がりなところ、あるでしょ？」

あんな話聞い

ても、私たちの前では涙ひとつ見せないのよ。でもいつかポキッと折れてしまうんじゃないかと思うと心配で……」

母親はまた泣きそうになりながら続けた。

「貴子ちゃん。もしかしたらあの子、貴子ちゃんたちにはわがママを言ったりするかもしれない。みんな忙しいだろうけど、支えてやってね。お願いします」

母親が頭を下げるので、私は慌てて言った。

「やめて下さい、おばさん。大丈夫です。私たちもしっかり芽衣のこと支えますから」

「ありがとう。芽衣にはいい友達がいてよかったわ」

母親は一息つくくと、気合を入れるように言った。

「さて、早く戻らないと変に思われちゃうわね。もう思われてるかもしれないけど」

ちよつと笑って、私たちは給湯室を出た。

「もう、お母さんも貴子も、どこ行ってたの？」

病室に入るなり、芽衣の呆れたような声が響いた。

「ごめん、ごめん。貴子ちゃんが手伝いに来てくれて、そのまま給湯室でおしゃべりしてたのよ」

母親がいつものように明るく話すので、私も調子を合わせた。

「そうなの。ついいつもの癖だね。ほら、みんなも会社でやってるでしょ？」

うまくごまかせたかどうか心配だったが、萌が素直に受け取ってくれた。

「貴子、そこまでOL生活にどっぷりなの？ やだなあ」
「なによ、フリーターに言われたくないわよ」

私は萌を軽くにらんでみせながら、ほっとしていた。そんな私を、芽衣はじっと見つめていたが、ぱっとみんなに顔を向けて言った。

「そうだ。今日は天気もよくて暖かいから、屋上に出ておしゃべりしない？」

「大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。少しは運動しないとね。それにいくら個室っていても、病室じゃ騒ぎにくいでしょ」

芽衣がいたずらっぽく笑って言うので、私たちはそうすることにしました。

みんなは「お菓子とジュース買ってく？」なんてワイワイ言っていたが、私は何となく、さっき芽衣の母親が言っていたことを芽衣は発表するつもりではないかと思った。芽衣の気持ちを考えると、胸が痛かった。

洗濯物がパタパタとはためく屋上には、私たちの他には誰もいなかった。

「貸切みたいだね！」

萌がはしゃいでベンチに走り寄る。その様子を見て、春菜は苦笑いした。

「まったく、子供じゃないんだから」

ひだまりのベンチに座ると心地よく、目を閉じると公園にでもいるような気分だった。

みんなでお茶を飲みながらまったりしていると、芽衣が口を開いた。

「あのさ、みんなに言っておかなきゃいけないことがあるの」

やっぱりと私は思った。本当は聞きたくなかった。信じたくなかった。でも、逃げるわけにはいかなかった。

「私ね、もう長くはないみたいなの」

「何が？ 退院まで？」

春菜が聞く。

「ううん、残りの命が」

「え……」

これには、母親の話を聞いていた私も驚いた。母親の話を聞いた時は、治療が長引くということだと思っていたのだ。

「手術して卵巣と子宮は取ったんだけど、もう既にあちこち転移し

てたらしくて、すべてのガン細胞を取りきることはできなかった
て」

みんなが絶句している中、佐智子は自分が卵巣ガンについて調べた内容を思い出したようだった。

「つまり、見つかった時点で既に進行してたってこと？」

「そう。だから、今後入院し続けて抗ガン剤治療をしなきゃいけないって。けど正直なところ、完治する見込みはないみたいなの。ただ、もっと長く生きられるようにするってだけのこと」

「そんなことって……。先生にはつきりそう言われたの？」

「ううん。先生も治らない、とは言いにくいんじゃない？」

「じゃ、ほんとに治るかもしれないじゃない。ううん、治るよ、きつと」

「治るわけじゃないじゃない！」

思わず大声で言った芽衣は、深呼吸して言った。

「ごめん。でもね、そんなの先生やお母さんの様子見てたら分かるよ。それにもし治療しなかったら、あと1年くらいだって言われたの。それが抗ガン剤治療だけで完治するとは思えないし」

「……」

私たちは何も言えずにいた。何か言葉をかけられたらとは思うのだが、簡単な言葉は、逆に芽衣にとっても迷惑だろうとも思った。

「それでね、私考えたの。話を聞いた時はショックだったし、1人でこっそり泣いたりもしたけど、今後どうするのかってことは、私が決めるべきだって思ってたね」

「今後どうするかって……。もちろん治療続けるんでしょ？」

佐智子がいぶかしげに聞くと、芽衣はきっぱりと首を振った。

「ううん。私、治療は続けないことにした」

「どうして!？」

私は思わず叫んだ。

「だって治療を続ければもっと長く生きられるんでしょ!？」
「なの
にどうして!？」
自分の人生を早く終わらせてもいいの!？」

「人生かな」

芽衣が静かに呟く。

「え？」

「確かに『生きてる』って意味では人生だけど、何もできずに病院のベッドに縛り付けられてるような人生なら、私はいらない」

「……」

「たとえ短くなっても、私は満足して最期を迎えたいの。あれもしたかった、これもしたかったって思いながら死ぬのだけは嫌なの。残された時間が1年なら、その1年を思いっきり生きたいの」

「やだ！ そんなこと言わないでよ、芽衣。もっと長く生きてよ。もっと私たちと一緒にいてよ」

萌が泣きながら芽衣の肩を揺さぶった。

それでも何も言わない芽衣を見て、春菜が言った。

「その決意はもう変わらないってことね」

芽衣は春菜をじっと見て頷いた。

「頭がくさるほど考えたの。後悔だけはしたくないから」

芽衣の真剣なまなざしを見て、その決意の強さを感じ取った春菜は頷いた。

「分かった。私たちが、芽衣の最後の1年を最高のものにしてあげる。後悔なんて絶対にさせない」

怒ったような顔で言いながら、春菜は泣いていた。みんなで抱き合いながら、私たちは大声で泣いた。泣かずにはいられなかった。

「どうしてこんなことに……」たぶんみんながそう思っていた。

しばらくして、芽衣が涙を拭いて言った。

「みんな、ごめんね、わがまま言って。でもわがままついでにもう1つお願いがあるの」

「何？」

「泣くのは今日で最後にしてほしいの。いつも笑っててほしいの。限られた時間を泣いて過ごすのはもったいないから。だから約束して。笑って過ごすって」

「そんな難しいこと言わないでよ」

萌は情けない声で言ったが、芽衣に「お願い」ともう1度言われて黙ってしまった。

「分かった。じゃ、みんな。もう泣いちゃだめだよ」

春菜が言って、私と佐智子は頷いた。

「約束する」

「私も」

「……私も」

萌も渋々頷くと、芽衣は笑顔で言った。

「ありがとうございます」

それはとても爽やかな笑顔で、余命1年を宣告された人とは到底思えなかった。その笑顔を見ていると、また鼻の奥がツンとしたが、空を見上げるフリをしてごまかした。

その日から、私たちの最後の季節が始まった。

芽衣の決断は、両親や主治医を混乱させたらしく、随分と説得に時間がかかったという。父親は怒り、母親は泣き、主治医は「そんなことは認められない」と、なかなか首を縦に振らなかったそうだ。それは当然だろう。私たちだって初めはそうだったのだから、血のつながった両親や医療のプロがすんなり認めるわけがない。

それでも芽衣は説得を続け、芽衣の『自分の人生は自分で決めた』という思いに、ついに両親と主治医は折れた。

退院の日、主治医は何かを芽衣に手渡しながら言った。

「これを肌身離さず持っていなさい」

それは芽衣の病状や今までの治療の経緯などを細かく記入したものだ。

「先生……」

「これがどこかで役に立つようなことにはなってほしくないんだけどね」

「ありがとうございます」

芽衣は深々と頭を下げて、それを大切に鞆に入れた。

「先生、本当にお世話になりました。最後までご迷惑をお掛けして……」

迎えに来ていた母親も深々と頭を下げた。

主治医と看護師たちに見送られて病院を後にした芽衣は、内心きつと不安だったに違いない。怖くてたまらなかったはずだ。それでも芽衣の瞳は輝いていたと、後になって母親から聞いた時、私は芽衣の意志の強さとまっすぐさに感動したものだった。

3月の半ばになって、私たち5人は旅行に出掛けた。行き先は仙台・松島。私たちが高校の卒業旅行で行ったところだ。

あの頃私たちは、これからの大学生活に期待で胸を膨らませていた。それと同時に、3年間一緒に過ごした仲間と離れることの寂しさでいっぱいだった。

卒業式を間近に控えた頃、私たちは3年間の思い出の締めくくりに、旅に出た。

2泊3日の旅行中、私たちはいろんなことを語り合った。文化祭や体育祭の話、怖かった先生の話、修学旅行の話、好きだった男の子の話、そしてこれからのこと……。

3日間はあるという間に過ぎ去り、私たちはそれぞれの道を歩き出した。

その思い出の地に行きたいと、芽衣が言い出したのだ。

私たちは予定を合わせて、あの時とほぼ同じ行程で旅行することにした。

「おはよ」

私と芽衣と春菜が新幹線のホームで待っていると、佐智子が急いでやってきた。

「おはよ。珍しいね、1番のりじゃないなんて」

「途中で忘れ物を取りに戻ったの。萌は？ 私もしかして最後？」
佐智子が心配そうに聞く。

「んなわけないでしょ」

「いつも通りよ」

「よかった」

佐智子が胸をなでおろしていると、春菜がおもしろそうに言った。

「そういえばさ、卒業旅行の時も萌は最後だったよね」

「そうそう！」

芽衣が手を叩きながら言った。

「新幹線の発車ギリギリに来てさ。指定席とってたから、みんなあせったよね」

「さすがの萌もあせってたみたいだったけどね」

それぞれがその時の様子を思い出して、くすくす笑っている。

「心配した反動でみんなめっちゃめっちゃ機嫌悪くなって、萌ったら泣きそうになって」

「で、何を思ったか、車内販売でアイスクリーム5つ買ったんだよね」

「私たちも『アイスでつるつもり？』なんて怒りながらも、食べてるうちに機嫌直っちゃって」

「結局つられてるよ、みたいな」

私たちは懐かしさと旅行のワクワク感でハイテンションになりながら大笑いしていた。

その時、私たちが乗る新幹線がホームに入ってきた。

「もしかしてまたあ？」

春菜が眉間にしわを寄せながら言う。それでも少し余裕があるように見えるのは、ギリギリでも間に合うことが分かっているからかもしれないかった。いつも遅れてくる萌だが、最低のラインを過ぎたことはないのだ。それが分かったのも、これだけ長く付き合ってきたからに違いない。

「ごめん！」

そうこうしているうちに、萌が息を切らして走ってきた。

「ごめんじゃないわよ。もうすぐ発車なんだからね」

私たちは慌てて新幹線に乗り込んだ。ホームではもう発車のアナウンスをしている。

「まったく。いくら卒業旅行と同じ行程にするからって、ここまで同じにしなくてもいいんじゃない？」

佐智子が呆れたように言うのと、萌は小さくなっていた。

「そんなつもりじゃないんだけど……」

「今回も……、分かってるよね？」

私が言うと、萌はぼかんとして聞いた。

「今回もって？」

「あ、来た来た」

芽衣が車両のドアを見て言った。

「すいません。アイスクリーム5つください」

芽衣が車内販売のお姉さんに言うと、萌はようやく思い出したようだった。

「それから、これとこれと……、あとこれもね」

春菜が言うと、萌が慌てて言った。

「ちよっとお、あの時はアイスだけだったじゃない」

「何言ってるの。2回目なんだから、同じペナルティでいいわけないでしょ。みんな、飲み物は？」

みんなが口々に注文すると、萌は渋々財布を出した。

「もう遅刻魔なんてやめる！」

萌はきっぱり言ったが、私たちは相手にしなかった。

「ほんと？」

「無理、無理」

「期待しないでおくわ」

「期待するだけ損だもんね」

私たちは顔を見合わせて笑った。萌も「もう」とふくれながら笑っていた。

東京から仙台までは、新幹線でわずか2時間弱だ。お菓子を食べたりおしゃべりしたりしていると、あっという間に到着した。

仙台に降り立った私たちは、市内を循環するバスに乗ってまわることにしていた。これは1日乗り放題で600円と、かなりお得なのだ。

レトロな雰囲気ของバスに乗り込むと、7年前の私たちと同じような卒業旅行らしきグループがいた。私たちは懐かしいようなまぶしいような気持ちで眺めていた。

仙台は伊達政宗によって今日の基礎が築かれたということで、あちこちに伊達文化の跡が残っている。当然、観光スポットには伊達政宗に関するものが多い。

15分ほどバスに揺れると、まずは瑞鳳殿に到着する。ここには伊達政宗が葬られているという。黒を基調とした、華やかな門構えだ。副葬品などの展示もしているので、遠い昔に思いを馳せながら、ゆっくりと見てまわる。

続いて行った仙台市博物館と仙台城跡も伊達政宗にゆかりのあるところだ。仙台城跡の天守台跡には政宗騎馬像が建っていて、仙台市街を見下ろしている。

私は何となく、この像から目を離せなかった。これはただの像なのに、この中に政宗の魂が宿っているような気がしてしょうがなかったのだ。人は命が尽きても、思い出がある場所や自分が長く住んでいたところにいたり、大事にしていた人のそばにいたりするものなんだろうかと思いつながら、私は像を見上げていた。

「何を思ってるんだろうね」

気付くと隣に並んで立っていた芽衣が呟いた。一瞬自分のことを言われたのかと思ったのだが、違っていた。

「政宗は何を思いながら、ここから仙台の街を見てるんだろう」

芽衣も自分と似たようなことを考えているのだと思った。それが嬉しくもあり、けれど少し悲しくもあった。

以前はそんな風に考えたりはしなかったのに、今そんなことを考えるのは、きっと芽衣の命のカウントダウンが始まっているからに違いないからだ。私たちは何も言わず、ただ並んで、政宗を見上げ

ていた。

「芽衣、貴子！」

後ろから呼ぶ萌の声にはっとする。顔を向けると、3人揃っている。

「そろそろ行かない？」

佐智子が言うので、私たちは政宗像に背を向けた。

「随分熱心に見てたね」

春菜に言われて答えに詰まった。像を見て考えていたことを話すのは、何となくはばかられた。

「うん。よくできてるなと思って」

不自然な答えだとは思ったが、春菜はそれ以上聞いてこなかった。「けどさ、意外と楽しかったな」

萌が言った。

「卒業旅行の時はね、瑞鳳殿も博物館も仙台城跡も、正直言ってあんまりおもしろくなかったんだ」

「そうだったの？」

「うん、歴史が苦手だからかな。でも今回は結構楽しかったの。歴史が苦手なものには変わりないのに、なんでだろ」

「それってさ、子供の頃にはアンティークものを見ても興味なかったのに、大人になるにつれ、そのよさを感じてくるってのと似てるような気がしない？」

「それはあるかも。なんて言うか、知識とかはないから頭で考えてもよさはわかんないんだけど、直接心に響いてくるって感じ」

「それだけ私たちも年をとったってことか」

芽衣がおどけて言い、私たちは笑った。

次に立ち寄ったのは、東北大学理学部のキャンパスの一角にある自然史標本館だ。

ここでは、昔から理数系が得意だった佐智子が興味津々で見まわっている。化石、鉱石、鉱物などの標本や、アジアの地図資料などが展示されているのだが、佐智子はひとつひとつ食い入るように

見ていたので、思ったよりも時間がかかった。

ようやく佐智子が満足して次の宮城県美術館に着いた頃には、さすがに疲れてきていたので、館内のカフェでひと息つくことにした。「ここ、ケーキが評判なんだって」

春菜がガイドブックを見ながら言ったので、私たちは早速注文した。

「お菓子食べたりケーキ食べたり、絶対太っちゃうよね」

「いいの、いいの。旅行ってのはそういうもんなだから」

ワイワイ言いながらケーキを食べ、美術館を出た時には、閉館ギリギリの時間になっていた。

私たちは仙台駅まで行かずにバスを降り、お肉屋さんが直営しているという牛タン料理の店で夕食をとることにした。

ゆったりとした店内に足を踏み入れると、いい匂いに食欲をかき立てられる。仙台の味である牛タンを思う存分堪能した私たちは、ようやくホテルにチェックインした。

翌日、私たちは松島に行くことにしていた。

仙台から電車で本塩釜というところまで行って、そこから船で松島へ行くのだ。船と言ってもただの船ではない。牡蠣鍋クルーズだ。塩釜港から松島まで、約1時間かけてクルーズしながら牡蠣鍋をいただくのだ。

乗船の手続きをして、ワクワクしながら船を待っていると、船がやってきた。

「うわっ。龍だ！」

萌が子供のような声を上げた。

船に大きな龍がついていて、かなりのインパクトだ。

「前は孔雀じゃなかった？」

佐智子が言うので、私は頷いた。

「そうだったよね。普通のと牡蠣鍋付きのとは違うのかなあ」

「他にもあるのかな。あるんなら見てみたいよね」

私たちは言い合いながら船に乗り込んだ。

船は1階が牡蠣鍋付き、2・3階が普通の客用になっていて、1階には既にコンロがセットされていた。

「見たら急にお腹すいてきちゃった」

「でも食べるのに夢中で景色を見てなかったなんてことにならないようにしなきゃね」

私たちはテーブルに貼られた名前通りに席に着いた。

松島は、天橋立、宮島とならんで日本三景の1つだ。湾内に無数の小島が点在する風景はとても美しく、松尾芭蕉も絶賛したと言われている。

私たちは牡蠣鍋と景色という、2つのごちそうを味わいながら、松島に到着した。

私たちはまず、観瀾亭松島博物館へ立ち寄った。そこは伏見桃山城の茶室を移築したもので、外観はとても簡素なものだ。それが1歩室内に入ると、障壁画が極彩色でなされていて目を奪われる。

目を奪われるのは障壁画だけではない。室内から見える自然の風景も素晴らしく、のんびりと眺めながら抹茶を飲んでいると、心が無になるような気がした。

観瀾亭に続いて円通院、瑞巖寺と見てまわり、私たちは参道にある茶店で休憩をした。

「ねえ、ここって380年くらい前の民家を修復したお店なんだって」

春菜がだんごを頬張りながら、ガイドブックを見て言う。

「380年！？ すっごい」

「大切に住めばそれだけ長持ちするんだね」

「古い建物って、ただそれだけでいい雰囲気醸しだしてるもんね。それはその建物の歴史が生み出してるのかもね」

「ほらまた。やっぱ年とったんだ」

また芽衣が言い、私たちは昨日のことを思い出して笑った。

ホテルに着くと、私たちはまず温泉に入った。松島の海を眺めな

がらのんびりつかり、手も足もしわくちゃになってようやく出た。
食事が終わると、おしゃべり大会が始まった。女の子同士の旅行
といえば、これがつきものなのだ。メインと言っても過言ではない
だろう。

「今晚は旅行最後の夜だし、盛り上がるわよ！」

春菜がそう言うのと、私たちは「おー！」と拳を突き上げて笑った。
春菜の宣言通りおしゃべり大会は盛り上がり、お腹を抱えて大笑
いしたり、昔の暴露話が飛び出したりした。隣の部屋の人はさぞか
し迷惑だったろうと思うくらいだった。

それでも旅の疲れからか、1人、また1人とダウンしていき、最
後には私と芽衣が残った。

「みんな寝ちゃったね」

芽衣は3人の布団を直して微笑んだ。

私たちは何となく、2人並んで膝を抱えて座った。

「ほんと、楽しかったね」

芽衣が静かに呟く。私も頷いた。

「出会ってから10年、みんな確かに変わったけど、でも根本的に
はあの頃のままだなって、この旅行ですごく思った。最高の仲間だ
なって」

私はまた頷いた。何か言うと言いてしまいそうだったのだ。

芽衣は確実に、自分の最期に向かっている。そう感じた。

誰にでも最期はある。でもその最期を認識している人はそういな
いはずだ。

私たちだって、どれだけ芽衣のことを思っても、どれだけ芽衣の
気持ちに寄り添っても、本当の意味で芽衣の気持ちを分かってあげ
ることはできないのだ。そう思うとたまらなく悲しかった。情けな
くて、切なかった。

何も言わない私の気持ちを知ってか知らずか、芽衣は私の膝をポ
ンポンと軽く叩いて明るく言った。

「あと1日だけど、めーいっぱい楽しもうね！」

「うん、そうだね！」

私も精一杯明るく答え、私たちは布団にもぐりこんだ。

芽衣がどんな気持ちで今この時を過ごしているのかと思うと、私はなかなか寝付けなかった。たぶん芽衣もそうだったのだろう。真っ暗な部屋には、3人の寝息だけが響いていた。

翌朝早くから起きだした私たちは、また温泉に入りに行った。

2日間はずっと曇りだったのだが、最終日になってものすごくいい天気になった。朝日にキラキラしている水面は、まるで宝石箱のようだった。

「きれいだね」

芽衣がため息をつきながら外を見ている。

「ほんと、心が和むよね」

すると佐智子が1つの島を指差して言った。

「今日行く予定の島、あれじゃないかな」

「ほんとだ。橋でつながってるし、きっとあれだね」

「天気がいいから橋を渡るのも気持ちよさそうだなあ」

私たちはそんなことを言い合いながら、またしわくちやになるまでつかっていた。

その島、福浦島まではきれいな朱色に塗られた長い橋を渡っている。気持ちのいい風に吹かれながら、私たちは島を目指した。

福浦島は自然植物園の指定を受けていて、たくさん植物が自生している。散策道があるので、私たちはのんびり歩きながら島を1週することにした。

途中にある見晴台で、私たちは自然と足を止めた。そこは7年前に来た時にも散歩の途中で休憩したところだ。

「覚えてる？　ここでみんなで将来の夢を叫んだんだよね」

「覚えてる、覚えてる。確か芽衣が言い出したんじゃないか？」

急に『そうだ！』って大声出して……」

「そうだ！」

みんなで休憩していると、芽衣が急に大声を出した。

「どうしたの？」

「ここでき、海に向かって将来の夢を叫ぶってどう？ 卒業旅行の記念にさ。なんか『青春！』って感じじゃない？」

「叫ぶの！？ 観光船とか通るかもしれないのに恥ずかしいよ」

「何言ってるのよ。せっかく来たんだよ。それに逆に地元じゃないでしょ」

「そりゃそうだけど」

結局、芽衣のおかしな理屈に何となく納得してしまった私たちは、順番に1人ずつ叫ぶことにした。

「じゃ、私からね」

芽衣が1歩前に出る。

「一生笑って過ごすぞー！」

私たちは吹き出した。

「何それ。将来の夢になってないじゃないない」

「いいの、いいの。トータル的な夢なんだから。次は誰？」

私が叫んだ。

「素敵な旦那さんと結婚するぞー！」

佐智子が叫んだ。

「研究者になりたーい！」

春菜が叫んだ。

「かっこいいスーツを着こなして、バリバリのキャリアウーマンになる！」

最後に萌が叫んだ。

「宝くじで1等を当てて！」

私たちは思い出して大笑いした。

「『宝くじで1等を当てて』なんて、完全に夢じゃなくて希望だもんね」

「ほんと。自分の決意を叫ぶはずが、お願いしちゃってんだから」
「だってえ」

萌は照れ笑いしながら言った・

「あの時はそれしか思いつかなかったんだもん」

「いつか叶うといいね」

芽衣がからかうように言った。

『いつか』……。芽衣が何気なく言った一言が、私たちの胸に突き刺さった。

それは私たちにはあって芽衣にはないものだ。誰もそんな気持ちを口に出すことはなかったが、今だけでも忘れようとしている現実が、私たちの胸に重くのしかかる。

暗くなりそうな気持ちを吹き飛ばすように、春菜が言った。

「さて、そろそろ行こっか」

「うん！ もう私、お腹すいてきちゃった」

萌もいつも通り飛び跳ねて賛成し、私たちは気持ちを切り替えて歩き出した。

旅行最後の食事は、海上レストランだ。新鮮な魚介と野菜を焼きながら食べるコースを選び、私たちはたらふく食べた。

「あゝあ、もうこれで旅行は終わりなんだね」

「早いよね」

「食べてしゃべって観光して……」

「『食べて』が最初にくるんだ」

佐智子が言いながら笑う。

「帰ったら写真大会しようね」

こうして私たちの最後の旅が終わった。

その後も学生時代の恩師に会ったり思い出の場所をめぐったりと、何かと集まっていたのだが、芽衣の体調は確実に悪化してきているようだった。それでも芽衣は、いつも明るかった。私たちもそんな芽衣に応えようと必死だった。

3、手紙

夏も終わる頃になって、芽衣はどうとう普通に生活できなくなり、再入院することになった。

私たちは毎日のように入れ替わり立ち替わり見舞っていた。疲れだろうからとあまり長居はしなかったのだが、芽衣は私たちの前ではいつも笑顔でいようとした。痛かったり苦しかったりするはずなのに、いつも通りの芽衣でいようとしていた。

そんな芽衣が痛々しくもあり、誇らしくもあった。これだけ頑張っている芽衣を見て、神様が奇跡を起こしてくれるんじゃないかと思ったりもした。

でも奇跡はそう簡単には起こらなかった。

芽衣の母親から連絡を受けて駆けつけた私たちが芽衣のそばに行くと、芽衣は荒い息をしながら言った。

「いい？ 絶対泣かないでね。私は楽しい思い出だけを抱えて天国に行くんだから」

「そんなこと言わないで！ もっといっぱい楽しいことしようよ！」

「みんなに会えてよかった。今までありがとう」

芽衣は弱々しく微笑み、大きな息をひとつした。そしてそれ以上、息をすることはなかった。ただ穏やかな顔で横たわっていた。

ピーという無機質な機械音が響き渡る中、主治医は瞳孔と脈拍を調べ「ご臨終です」と頭を下げた。

父親と母親は既に覚悟を決めていたのか、取り乱すことはなかったが、抱き合って肩を震わせていた。

「芽衣……。芽衣！ やだよ！ こんなやだよ！ 目を覚ましてよ！」

私はこらえきれず、芽衣にしがみついて泣いた。

私の後ろで、春菜が涙声で呟いた。

「泣かないでなんて……。そんなの無理だよ」

こうして、芽衣のあまりにも短い人生に幕が下りた。私たちの胸にたくさんの思い出を残して。

祭壇には、最後の旅行で撮った写真が飾られた。芽衣が1番気に入っていた写真は、今はたくさんの花に囲まれている。

写真を見ていると何度も涙が出そうになったが、私たちは奥歯を強く噛んでこらえた。芽衣が死んでしまった時には約束を破ってしまったから、お通夜やお葬式では絶対に泣かないでおこうと決めたのだ。

次々と現れる焼香客に、芽衣はずっと笑いかけていた。私たちも大好きなとびきりの笑顔だ。

私たちと同じように、焼香客たちも芽衣の笑顔を見て余計に悲しくなるようで、写真を見上げては泣いていた。

火葬場に運ばれ、棺桶が中に入れられた。扉が大きな音を立てて閉まった瞬間、私は思わず目を閉じた。これで本当に終わりなんだ、今ここにある芽衣の体さえなくなってしまうんだ。そう思うと苦しくて、私たちは耐え切れず外に出た。

空を見上げると、煙突からのぼる煙が澄んだ空を泳いでいく。

「あれ……。芽衣の煙かな」

萌がポツリと言った。

「そうだね、きっと」

「芽衣、ほんとにいなくなっちゃったんだね」

「違うよ。私たちの中にいるじゃない。ずっと」

佐智子は自分の胸に手を当てて言った。

「そっか。そうだね」

私たちも胸に手を当てて煙を眺めた。

「ね。芽衣にちゃんとバイバイしよう」

私たちは精一杯の笑顔で空に向かって手を振った。風に揺られた煙は、まるで私たちに手を振り返しているようだった。

お葬式がすべて終わって私たちが帰ろうとすると、芽衣の母親がやって来た。

「みんな、本当にありがとう。忙しいだろうに、あの子のわがままにとことん付き合ってくれて」

母親は頭を下げた。春菜は首を振って言った。

「私たち、約束したんです。芽衣に残された時間を最高のものにするって。絶対に後悔させないって。……本当にできたのかは、もう芽衣には聞けないけど」

「できたと思うわ。充分満足してるはずよ。だからこそ、あんなに穏やかな笑顔で最期を迎えられたのよ」

母親はそう言って、バッグから封筒を取り出した。

「これ、お葬式が全部終わったらみんなに渡してって頼まれてたの」それは芽衣からの私たちに宛てた手紙だった。

母親が行ってしまうと、私たちは円になって封筒を開けた。便箋を開くと少し乱れた、でもやっぱり見慣れた芽衣の文字がたくさん並んでいた。

私たちはしばらく黙って見つめていた。

「じゃ、読むね」

春菜が深呼吸をして読み始めた。

貴子、春菜、佐智子、萌。お通夜とお葬式、お疲れ様。そして何より、私がガンのことをみんなに話してから今まで、ずっとずっと、お疲れ様。私の無理なお願いも聞き入れてくれて、泣いたりせずに楽しいことにいっぱい付き合ってくれてありがとう。大変だったでしょ？（笑）でもそのお陰で、私は悔いのない人生を全うすることができました。本当に、本当に本当にありがとう。いくらお礼を言っても足りないくらい、感謝してるよ。

私ね、たった26年しか生きられなかったけど、100年分くらい充実してた。すごく満足してるの。だからもう、先に行ってるね。

何十年か後に、絶対また会おう！

貴子。前にも言ったけど、貴子の存在はすごく大切で、みんなにとって絶対必要な存在だよ。でもね、中和剤に徹する必要はないんだよ。時にはわがママを言っても大丈夫。今回わがママを言いまくった私が保証する。みんなはちゃんと、受け止めてくれるよ。

春菜。私たちが仲良くなったきっかけを作ってくれたのは春菜だったね。あの時春菜が声を掛けてくれなかったら、こんな幸せな最期じゃなかったかも。ありがとうね。みんなを引っ張ってくのは大変だと思うけど、みんなのこと、よろしくね。

佐智子。いつも冷静な佐智子に、私たちは随分救われたことが多いと思うんだ。私がガンを告白した時も、治療を続けないって言った時も、佐智子のお陰で落ち着いて話ができたの。これからみんなが脱線しそうになったらストップかけてあげてね。

萌。萌は泣き虫で甘えん坊だから、私との約束が守れるか心配だったけど、頑張ってくれてたね。遅刻したりわがまま言ったり、ほんとに手の掛かる萌だけど、いつも自分に正直なところはみんなが大好きなところだよ。でも遅刻はもう少し減らそうね（笑）

それじゃ、みんな。元気でね。バイバイ！

4、返事

芽衣の49日が済んで、私たちはまた旅に出た。

自分たちの気持ちに区切りをつけるために思い出の地に行くことにしたのだ。5人で初めて行き、5人で最後の旅行となった仙台・松島へ、今度は4人で向かった。

行く先々で、芽衣が言ったことやしたことを思い出して話しながら、私たちはまた同じように旅をした。夜のおしゃべり大会では、芽衣の話ばかりだった。時には笑い、時には泣きながら、私たちは語り合った。

最後の日、福浦島に渡った私たちは、また見晴台で足を止めた。何も言わず、みんなで海を眺めていると、佐智子が言った。

「私ね、会社辞めたんだ」

「え！？ どうして？」

私たちは驚いて聞き返した。

「卒業旅行の時、私『研究者になりたい』ってここから叫んだじゃない？ でも今は、普通のOL。夢なんて、自分の心から追い出して生活してた。でもそれでいいのかって思ったの。だからね、もう1度大学に入りなおそうと思って。大学でもう1度勉強して、今度こそ本当に研究者を目指したいの」

「そうなんだ。すごいじゃない」

「ほんとになれるか分かんないんだもん、すごくなんかないよ」

「ううん、そう思ったことがすごいんだよ」

春菜はそう言って、「実は私も……」と続けた。

「実は私もね、ちょっと考えてることがあるんだ」

「考えてること？」

「今度ね、新プロジェクトの企画案を、社員全員から募るんだって。今まではそんな大変そうって避けてたんだけど、今回はやってみようと思うの」

「プロジェクトの企画案か。やりがいありそうだね」

「うん。今まで何もしてこなかった私がどれだけできるのか分からないけど、やれるだけやってみるつもり」

春菜は空を見上げてきっぱり言った。

「私はね、まだはつきり分かんないんだけど、映画に携わる仕事をしたいなって思ってた、今いろいろ調べてるところなんだ」

「そうなんだ。貴子、映画好きだもんね」

「せっかくこれだけ好きなんだったら、それを生かしたいなって思ってたね」

すると萌が「私！」と手を上げた。

「どうしたの？」

「私、今までずっとフリーターだったけど、ちゃんと就職しようと思ってるんだ」

「萌が就職!?!」

私たちは声を揃えて言った。

「なによ、そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「どうしたの、一体」

「もう少し、しっかりしなきゃなって。いつまでも甘えてばかりやだめだなんて思ったんだ。それに宝くじもなかなか当たらないし」

萌が肩をすくめて言い、私たちは笑った。

久しぶりに心から笑ったような気がした。

芽衣の告白を聞いて以来、笑っていても心のどこかがチクチクと痛んでいた。今はもうない。今は本当に笑っている。

「芽衣は私たちにいろんなことを教えてくれたね」

私が呟くと、みんなが頷いた。

「いつも前向きでいること」

「いつも一生懸命であること」

「自分の意思を大切にすること」

「笑顔を忘れないこと」

私たちはそれぞれに芽衣のことを考えていた。

すると春菜が海に向かって大声で叫んだ。

「芽衣！ 今までありがとう！」

佐智子が叫んだ。

「芽衣のこと、絶対忘れないよ！」

萌が叫んだ。

「私たちのこと、見守っててね！」

私も叫んだ。

「芽衣の分まで、4人で笑って生きてくからね！」

そして私たちは、声を揃えて叫んだ。

「バイバーイ！！」

私たちは何度も叫んだ。大きく手を振りながら、何度も何度も叫んだ。

やがてだれからともなく叫ぶのをやめ、顔を見合わせて頷きあい、私たちは歩き出した。不確かだけれど自分だけの未来に向かって。

（完 結）

4、返 事（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

大切な人を失うのは本当に辛いものですが、いつも強くあろうとした芽衣から何かを学び取った貴子たちは、新しい1歩を踏み出しました。これからも4人は、芽衣を心に大切にしまっけて歩き続けていくことでしょう。

このお話は悲しいお話ですが、悲しいだけではなく、「よし、頑張ろう」という爽快感のようなものも感じて頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8810c/>

旅立ちの空

2010年10月8日15時16分発行